

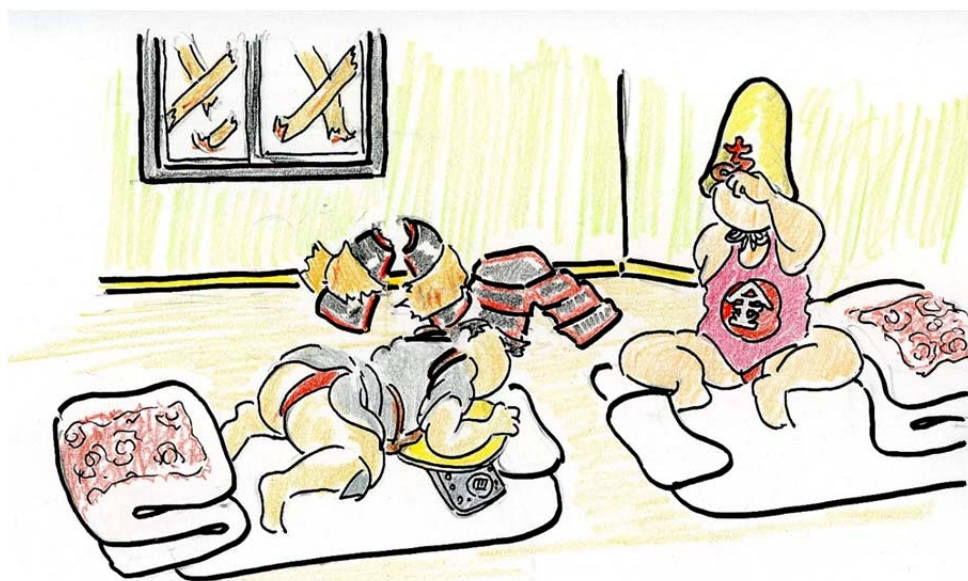
支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.10

その日の夜半、スパイダーマンに扮し、大暴れした余韻を母屋の壁と鎧に残したまま、番小屋で床に就きましたのじゃが、翌、寅の正刻（朝4時）、拙者は季節外れの暑さに目を覚ましたのでござる。

「はてさて、やがて霜月（11月）にもなろうというに、この暑さは何としたことじゃ。」と、ひとりごちながら（意：独り言を言いながら）床の上で胡坐をかき、隣をみればご助めが胸に小判を抱えながら、いぎたなく寝ておりもうした。



「ふっ、拙者が頂くはずの姫様の褒美の小判か。」と、良く見れば小判の影か

ら一朱金いっしゆきん（意：現在の5千円相当）が見え申したのじゃ。

はて、昨夜褒美にと、ご助に渡したのは一朱銀だった筈じゃがと、いぶかしく思い、さらにその一朱金を見れば鉛筆で拙者の判じ文字「〇に四」が書かれておった。

「さては・・・」だらしなく眠りたるご助めをキッと見据え、問い詰めようとした刹那、

「あ、旦那様、お早いお目覚めで・・・どうしたんです？怖い顔をして。」とご助が目覚めたのでござるよ。

「ど、どうしたもこうしたも無い。そちの懐の一朱金は如何したのじゃ？」と問えば、

「見たんですかい？嫌ですよ旦那様、人の懐を見るなんて趣味が悪いですぜ。」

と答えるご助に

「な、な、何をしれっと語っておる。その一朱金は拙者の・・・」と問い詰める拙者を制し、

「左様です。ガムテープを買うのに旦那様が下された一朱金でさ。」とご助。

「渡した金は使ったのじゃろ？何でまだ、そちの懐にあるのじゃ？」と更に訊く拙者に、

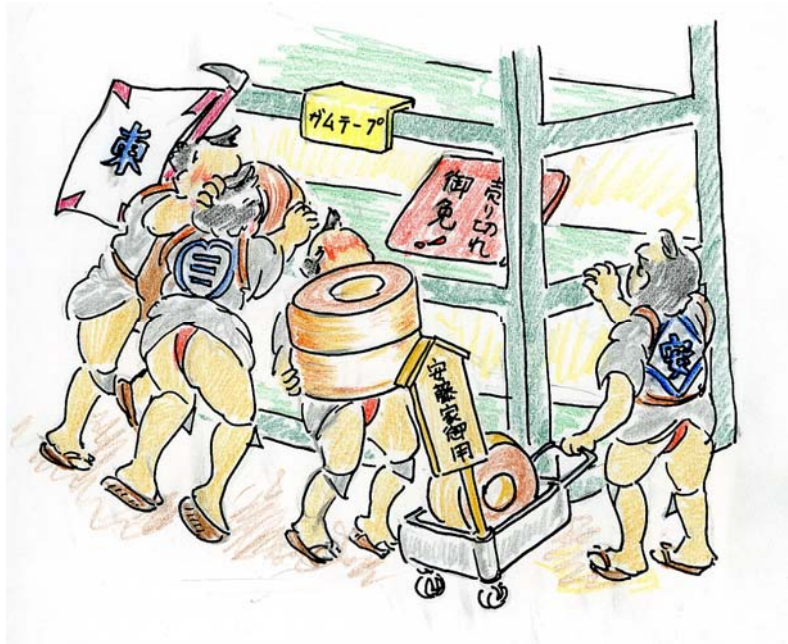
「旦那様は一朱金を私に渡されますときに、何とおっしゃいましたかの？」とご助。

「窓に貼る分のガムテープを買って来よ。余れば其方そなたの小遣こづかいにしたら良いと申した。」と答えると

「ですから私の小遣にしたんでさ。」とご助。

「???。何を言っている。ガムテープを買ったんじゃろ？買ったのに何でまだ一朱金が……。それも拙者の判じ文字『〇に四』が書かれた一朱金がそちの懐にあるのじゃ？」と問いますれば、

「才覚ですよ、才覚。井原西鶴ちゃありませんぜ。台風に備えて各お屋敷が急に、それもこぞってガムテープを買い求められるもんだから、ホームセンターにもドンキにもありゃしやせん。そこで私は考えたんでさ。」



「何をぢじゃ？」と拙者が重ねて聞きますれば、

「先日、旦那様がお風呂をお借りになられ、爆発させた義兄様の長屋がござい
ましよ。」（※VOL6 参照）

「爆発させたは余計じゃが、確かに・・・。」

「あの時は割れた窓という窓、沢山の窓の養生にと、義兄様が大量のガムテー
プを買っていたのを思い出したんでさ。そこで義兄様のところのご助をとっ捕
まえてガムテープを融通^{ゆうずう}して貰ったという訳でさ。」と答えたのでござる。

「うぬぬ・・・」にわかには信じられない拙者は、グイッと胴巻きを引き寄せ
中を確認したのじゃ。そうしたら、昨夜、家計簿に記入した金子^{きんす}（意：お金）
が確かに入っておった・・・。一朱金が2枚・・・「〇に四」の一朱金が。

拙者は大いに恥じ入った。大事な中間のご助を疑うなんぞあってはならん事じゃと・・・、じゃが、すぐに思い直した。ご助の日頃が日頃だけにと自分を正当化することで平静を取り戻そうとしたのじゃ。

そんな拙者の心中を知ってか知らずか、ご助は「だいたい準備にかかるのが遅すぎるんでさ。台風様なんざ大分前からお出でになるのが判ってるんだから、明日来なさるって段になってガムテープを買いに行くなんざチャンチャラおかしくって・・・臍が茶を・・・」と続けるものだから、ますますバツが悪くなった拙者は、

「ええい、黙れ黙れっ。それならそれと何故拙者に話さんっ。義兄様にもお礼を申し上げねば義理を欠くではないか！」とご助を叱ったのでござるよ。



後刻、義兄様に連絡を入れ、お礼を申し上げましたところ

「なあに良いってことよ。お屋敷で出た不要紙を片すためのガムテープを呉れ
と言うから持たせたのじゃ。・・・台風?・・・窓に?・・・あのガムテープ
を?・・・そりゃ・・・大丈夫かい・・・?」と義兄様がおっしゃるので、



「何故ですかの?」と お聞きすると

「分らんか?ありゃあ紙テープじゃ。それに日経っているからベトベトしと
るじゃろ。う〜ん。大変じゃぞ剥がすの・・・。専用の剥がし液・・・スプレ
ー式とかあるが、結構高かったと思うぞ。」と、お話し下されたのじゃ。

義兄様との電話を切り、

「ご助・・・。」と呼びかけるも返事はなく。

「ご助、ご助、ご助、ご助えっ！そちは何ということをしたのじゃあっ！出てこいっ！」と大声をあげてもご助は帰ってきませなんだ。

フェーン現象で段々と暑さを増す晩秋の朝、拙者は母屋の庭に立ち尽くし、番小屋と母屋の窓という窓ではためく紙のガムテープをいつまでも見つめておった。

その日の昼下がり、気温は更に高くなり、拙者は台風が過ぎた後のガムテープの処理方法や金子の手配など、汗をかきかき考えておったのじゃが、なかなか妙案は浮かんで来ない。



昨日からの疲れで脳のお味噌が糖を欲していたのじゃ。

「甘いものでも食べたいのう。」という偏桃体（本能）と「無駄遣いはだめじゃ！」という前頭前野（理性）の戦いはおよそ3秒、あっけなく偏桃体の勝ちとなりましてな、と、そこへ遠くから

「い～し～や～きいもお～・・・。ほっか、ほっかのお芋だよ～。」と車のスピーカーから流れるアナウンスが、近づいてまいったのでござる。

一方の助。

下百々女木町（現：宝町）に続く大通りの縁石に座り込み、溜息をついておった。旦那様（支援）にご迷惑をおかけし、落ち込んでおった・・・のではなく、走って逃げた時に懐の金子を辰巳用水に落としてしまったのじゃった。

そこへ・・・

「ぼすけ、にゃにしてる。にゃにかおいしいものでも落ちているのか？」と点徳幼稚園からの帰り道、通りかかった援姫様がお声を掛けてきたのじゃった。

「ああ、姫様ですかい。なにね、藤五郎様に金を喜捨きしよ（意：差し上げた）しちまったんでさ。」とご助。

「とーごりよう？いみよほりのとーごりよう（芋堀藤五郎）にか？」と姫様。

その後、ご助は今朝からの支援とのやり取りから、辰巳用水に小判を落としたことなどを話して差し上げたのじゃ。それに姫様は・・・。

「小判ならありゆじよ。」 と、 べんだい（意：正月飾り）から引きちぎっておいた残りの小判をご助に見せられたのじゃった。

「ぼすけ元気をだしえ。ちえんにこれで甘いものでも買ってかえりよ。」 そう言うと

「い～し～や～きいもお～・・・。」とスピーカーを鳴らし近づく軽トラックに手を挙げると

「くりゆしゅうない（苦しゅうない）、芋屋、近う。」とのたまわった（意：おっしゃった）のじゃ。



今回の教訓は・・・

だいたい準備にかかるのが遅すぎるんでさ。台風様なんざ大分前からお出でになるのが判ってるんだから、明日来なさるって段になってガムテープを買いに行くなんざチャンチャラおかしくって・・・でした。

(つづく)